

コブシ

宮内 泰之

(人間社会学部人間環境学科)

Magnolia praecocissima

MIYAUCHI Yasuyuki

1. はじめに

コブシ (*Magnolia praecocissima*) はモクレン科モクレン属の落葉高木である。北海道、本州、九州、および朝鮮(済州島)に分布している。山地を中心に低地にも生育するが、どちらかというと湿った平坦地を好むようである。早春に葉の展開に先立って咲く大きな白い花は、名曲「北国の春」にもうたわれているとおり、北国では春の到来を告げる待ち遠しいものとしてとらえられている。近縁種にタムシバ (*M. salicifolia*) がある。こちらは本州、四国、九州に分布し、山地の急斜面や尾根筋に生育する。生育環境がやや異なるほか、関東平野にはコブシは生育するがタムシバは見られず、東海地方の丘陵地と四国にはタムシバしか自生しないなど分布の違いがある。



コブシの花

公園樹や街路樹として利用されるほか庭木としても植えられる。ただし、樹形が大きくなるため、庭木として植栽するためには広い空間が必要となる。そのため、庭木としては樹形を比較的小さく抑えることができる中国原産の近縁種であるモクレン (*M. quinquepeta*)、ハクモクレン (*M. heptapeta*) がよく見られる。また、日本原産のシデコブシ (*M. tomentosa*) も庭木として植えられる。コブシを含め、いずれの樹種も自然に樹形が整うため、懐に生じ

たからみ枝や不自然な方向（幹の方向や真上）に伸びた枝を取り除く程度の剪定となる。樹形を小さく抑える必要があるときのみ、花後に強剪定を行う。また、病虫害がほとんどなく、育てやすい樹木である。

2. コブシの名前と農事暦

正式和名の‘コブシ’は、牧野(2000)によると「拳の意味で、つぼみの形にもとず[ママ]いたものである」とある。しかし、他の多くの図鑑では果実の形が握りこぶしに似ているためとされている。どちらが正しいのかはわからないが、毛に被われたつぼみの形よりも、ごつごつした集合果のほうが拳というにふさわしく感じる。つぼみを由来とする説に対しては、平安時代末期に編まれた続詞花和歌集にある「時しあれば こぶしの花も ひらけけり 君がにぎれる 手のかかれかし（よみびと知らず、時が経てばコブシの花も開くということです、あなたの握った手もそのように開けばよいのに）」という和歌がよく引き合いに出される。つまり、花が開くのため、握った手はつぼみにたとえられている、ということになる。しかし、この和歌だけでつぼみを由来と断定するのはどうだろう。残念ながら、この他では、コブシは古典の和歌にはほとんど詠まれていない。コブシの花が早春に野山を鮮やかに彩ることを考えると、万葉人はなぜこの花に目を留めうたに詠まなかったのか、不思議なことである。なお、漢字では普通‘辛夷’と書く。古来、中国ではモクレンのつぼみを乾燥させたものを辛夷と称していたことから（木村、2005）、モクレンと似た樹木であるコブシに辛夷の漢字を当てたのだろう。

コブシの古名には、‘コブシハジカミ’、‘ヤマアララギ’ などがある。いずれも、コブシの実に辛みがあるためとされている（牧野、2000）。前者の‘ハジカミ’はサンショウの事で確かに辛みがあるので納得がいく。しかし、後者について牧野は「山に生えて辛みがあるから」としか説明しておらず、‘アララギ’が何を指しているのかについては述べていない。一般的には、‘アララギ’は針葉樹の‘イチイ’の別名として知られている。イチイの実の赤い部分（実際には仮種皮）には甘みがあるので、毒のある種子を辛みととらえたとも解釈できる。しかし、そもそもイチイは山に生えているので、ヤマアララギ

という表現はおかしいように思う。これとは別に、アララギは‘蘭’と書いて多年草の‘ノビル’の古名ともされている。ノビルの鱗茎は確かにやや辛みがあり、野に生えているので、これに対してヤマアララギであれば合点がいく。なお、アララギを広辞苑で引くと‘塔’という意味も出てくる。早春に白い花を全体にまとった姿を、あるいは、花の中央に雌蕊と雄蕊がらせん状に配置する円錐形に立ちあがった花床を、それぞれ山の中の‘塔’と見立ててヤマアララギと呼んだ、と考えることはできないだろうか。

上記のほか、コブシは北国を中心として‘田打ち桜’^{タウチザクラ}、‘種播桜’^{タネマキザクラ}、‘芋植花’^{イモウエバナ}などの別名で呼ばれていた。いずれも、長い冬の終わりを告げるコブシの開花を、「田に鋤を入れ始める」、「豆を播いたり種粃を浸す」、「ジャガイモを植える」など、種々の農作業に取り掛かる目安としていたのである。この他にも、「コブシの花が多い年は豊作、少なければ凶作」とか「コブシの花が上を向いて咲く年は雨風が少なく豊作。横を向いて咲く年は風の日が多く、下を向いて咲く年は雨が多くて凶作」といったように(山田、1993)、コブシの開花は農事暦や天候の長期予報に利用されていた。コブシは木が大きくなると隔年開花の傾向が強くなることが知られている。春に多くの花が咲きそれらが夏の間順調に生育すると、樹体内の養分は果実の充実に集中し、翌年開花する花芽形成は阻害されることになる。これとは反対に、開花が少なければ多くの養分が花芽形成に向けられることになる。このように、隔年開花を大雑把に説明してしまうと、コブシの花と作物の豊凶とはあまり関係ないのではないかとなってしまう。しかし、前年が凶作だった年に、待ちに待った春の山を彩るコブシの開花を見た農民たちには、「今年こそは豊作を」と願わずにはいられなかったのではないだろうか。

3. モクレン科の特徴と葉の形の進化

モクレン科の花は大きく目立つものが多いが、花がない時期には一部の特徴的な葉をつけるものを除いて、樹種の同定は比較的難しいかもしれない。しかし、モクレン科に属する樹木には共通する形態的な特徴がある。多くの植物には芽生えの葉を保護するために托葉という葉状の器官が存在する。モクレン科の樹木の場合、托葉の生え際が枝を一周取り巻いている。托

葉は葉が展開していく過程で欠落し、展開した葉の葉柄が接続する枝の部分(‘^{せつ}節’という)に托葉の生え際が痕跡として残る。つまり、モクレン科の樹木には、枝の節の部分に托葉痕という枝を一周取り巻く筋を見ることができる。したがって、(モクレン科以外にもプラタナスなどに同様の托葉痕が見られるが)国内の野山で樹木を観察している場合、枝を一周する托葉痕を見つければ、それはモクレン科に属する樹木と見てほぼ間違いがない。

そもそも、托葉痕のような細かい特徴を見極めなければならないのは、先にも述べたとおりモクレン科の樹木の葉そのものに特徴が乏しいからである。ホオノキのように特に大きな葉をもつものや、ユリノキのように半纏のような特徴のある形の葉をもつものはともかく、コブシ、モクレン、タムシバなどの葉は、葉序は互



托葉痕

生(対生のものよりも多数派)、葉の縁も全縁で葉脈もあまり特徴のない羽状脈、葉にも特徴的な香りがなくなると、見慣れていなければ葉だけで名前を即答することは難しいであろう。常緑性のオガタマノキに至っては、関東地方に自生はなく、神社などに植えられている場合でも葉だけでは見当がつかない。しかし、そんな時も枝を見て、托葉痕を見つければもう大丈夫である。

モクレン科の樹木の葉に特徴がないと捉えられる原因の一つは、全縁であることにある。しかし、国内に自生する樹木全体を対象とすると、落葉性(以下では冬期に落葉するので‘夏緑性’と表現する)の単葉で全縁の葉を持つ種が多数を占める分類群というのはごく限られている。それは、モクレン科、クスノキ科クロモジ属、ミズキ科で、それ以外ではカキノキ科などの比較的小さな分類群や、スイカズラ科のウゲイスカグラのように科の中では例外的なものくらいである。そもそも、夏緑性なのに全縁というのは矛盾する性質を併せ持っていると考えることができる。常緑樹の場合、南方つまり暑い地域に行くほど葉に鋸歯を持つ種が少なくなっていく傾向がある。逆に、涼しい地域を中心に分布する夏緑樹は、ほとんどが葉に鋸歯を持つ種である(複葉のマメ科は例外的に小葉が全縁)。この理由を説明することは難しいが、

簡単に言うと光合成と葉の蒸散作用に起因していると考えられる。つまり、涼しい地域の樹木の葉が鋸歯を発達させると考えるよりも、暑い地域の樹木の葉が蒸散を少しでも抑えるため、縁をしっかりとコーティングした結果、鋸歯がなくなったと考えた方がよいように思う。

ところで、近年、植物の遺伝子解析の技術の進歩とデータの蓄積により、植物の分類はAPG(Angiosperm Phylogeny Group:被子植物系統発生グループ)分類体系に移行しつつある。この新しい分類体系によると、先に挙げた少数派の3分類群のうち、モクレン科とクスノキ科は被子植物の中では極めて初期に(単子葉類よりも先に)分岐した分類群に位置づけられている。もっとも、遺伝子解析が発達する以前から、これら2科に属する原始的な植物の化石が第三紀白亜紀(被子植物が地球上に初めて出現した時期)の地層から発見されていることから、これら分類群は原始的であると考えられていた。先に述べた夏緑性なのに全縁という矛盾する性質を併せ持っている点は、原始的なグループであるということに通じるものがあるのではないかと考えている。それは、系統的により後に分岐した分類群は、形態的な矛盾を解消して進化を遂げているはずだと考えられるからである。

4. シデコブシ

冒頭でふれたシデコブシは落葉性の小高木で、大きいものは高さ10m程度にまでなる。コブシよりも小型のため、ヒメコブシの別名がある。花は4月頃、葉の展開に先立って咲き、花被片は9～25枚、ふつう白色だが、濃いピンク色を帯びるものは特にベニコブシと呼ばれている。花被片はコブシなどと比べると細長く、これが多数垂れ下がっている様子を、神道



シデコブシの花

の玉串や注連縄などに使うシデ(幣、四手)に見立ててこの名がある。糸魚川(2007)によると、「岐阜県の東濃～中濃～岐阜地方から愛知県の三河東部地域、西三河の渥美半島、三重県の北勢地方に」分布する。この限られた地域内において、貧栄養で日当たりのよい湿地に自生することから、シデコブシは

環境省の第4次レッドリストに準絶滅危惧として記載されている。これとほぼ重なる地域では、ハナノキ(同絶滅危惧Ⅱ類)、ヒトツバタゴ(ナンジャモンジャとも呼ばれる、同絶滅危惧Ⅱ類)という、やはり自生状態では非常に珍しい樹木が見られ、これら3種は東海丘陵要素(植田、1989)を代表する植物群として知られている。

現在、シデコブシをはじめとする上記3種は生育地が保全され、地元のボランティア団体や行政により保全活動が展開されている。また、自生地マップが作成されているため、比較的容易に自生地を訪れることができる。

2012年8月、この自生地マップを頼りに、岐阜県中津川市千旦林にある岩屋堂のシデコブシ群生地を訪れた。ここには約160株、500本のシデコブシが自生し、規模は最大であるといわれている。残念ながら花の時期ではなかったが、高さ5～6m程度の群落を形成するたくさんのシデコブシが葉を青々と茂らせている光景は壮観であった。この年は花がやや少なかったのか、果実は少ししか見つけることができなかった。群落は水田と接しており、その境界部に木道が設置されて観察のための便が図られていた。周囲には水田、畑、民家があり全体が私有地となっているため、農作業等の妨げにならないよう、観察の際には注意が必要である。花の時期に再び訪れてみたいものである。



シデコブシ群生地



シデコブシの果実

5. 園芸的利用

コブシは1879年にヨーロッパに導入されて以来、アメリカ東北部などで盛んに利用されるようになった。今日見られる園芸品種としては、20世紀初頭

のヨーロッパでシデコブシと掛け合わせて作られた *M. × loebneri* をもとにして、‘Leonard Messel’、‘Ballerina’、‘Spring Snow’、‘Merrill’ などの園芸品種が作られている。いずれも、コブシの耐寒性とシデコブシの多数の花弁、樹高の低さが受け継がれている。一方、タムシバとの自然交配でできたとされるシバコブシ (*M. × kewensis*) からは、‘Wada’s Memory’ という園芸品種が作られている。これは、シャクナゲの導入や品種改良で有名な和田弘一郎氏が、ワシントン大学に送った種から選抜されたものである。タムシバの芳香性が生かされている。

シデコブシは、1877年にヨーロッパに紹介され、英名では *star magnolia* と呼ばれている。樹形が小さく花の観賞価値が高いことから、‘Royal Star’ (つばみは帯桃)、『Waterlily’ (白花)、『Susan’ (紅紫色、芳香性)、『Yellow Bird’ (鮮黄色) などの多くの園芸品種が作られている。

6. おわりに

コブシの花は里に春を告げ、農作業の開始を知らせるなど、人々の気持ちを新たにさせてくれる作用がある。また、植物の歴史においても、被子植物の黎明期を担う原始的な分類群に属している。物事の始まりを飾るコブシとその仲間であるが、シデコブシのように野生下では絶滅の危機に瀕し、その歴史が閉ざされかねないものもある。1億年以上も前から進化の道筋をたどった果てに、今日の私たちが見ることができるシデコブシであるが、人の手によって絶滅に追い込まれてしまうことがないことを願うばかりである。

参考文献

- 糸魚川淳二 2007「シデコブシ・ハナノキ・ヒトツバタゴの自生地地形と地質(予報)」
『地学雑誌』116(5): pp.673-680
- 木村陽二郎監 2005『図説花と樹の事典』p.181 柏書房
- 牧野富太郎 2000『新訂牧野新日本植物圖鑑』北隆館
- 山田卓三監 1993『花歳時記大百科』pp.137-140 北隆館